

String  
Fiction Series

3

親和力



YAMANAKA TOMOTAKA

山中與隆

Duo-Yamanka

# 親和力

---

山中與隆

目次

親和力 1

編者あとがき

24

# 親和力

作 山中與隆

団員たちが三々五々集まってきた。新しく入るといふのはこの人のことだなといった顔で、先に来てチエロをさらっている隆史を興味深そうに見ながら、それぞれの楽器や楽譜の準備を始めた。先週まで隆

史がいた八十人以上の大津の市民オーケストラと違って、集まったのは十数人。全員でこれだけなのだ、と隆史は思った。チェロの団員が、練習する曲の楽譜一式を隆史に渡した。新入団員のためにあらかじめ準備されていたのだ。

練習が始まる前に真弓が指名されて、隆史を紹介した。

「昨年まで大津で一緒に奏いていた室井隆史さんで

す。大津のオーケストラはご存知のように規模の大きいフルオーケストラですが、室井さんはそこでトップをされていました。このたび大津の方を退団してこちらに入って下さることになりました」

真弓がここまで言うと、

「ほうっ」

と声が上がった。また、

「大津は、バイオリンとチェロのトップを相次いで

失ったんだ」

とささやく声も聞こえた。真弓は続けた。

「今年の年賀状で私が新しい合奏団に入ってスークの弦楽セレナードを奏くと書いたら、ご自分も奏きたいと言われるので、お誘いしたのです。来てくれて本当に嬉しいです」

真弓の紹介に応えて隆史が立った。

「室井隆史、三十七歳、地方公務員です。住まいは

彦根市内です。山登りにはまっている妻とテニスとソフトボールをやっている中学生の女の子が二人です。我が家では僕だけが文化系です。大津でトップだったと言っても、名ばかりの下手なトップでしたから……。ただスークと聞いて、どうしても奏きたくなつてあつかましくやつて来ました。鯖江は吹奏楽の街と聞いていましたが、弦楽合奏団とはいいですね。どうぞよろしくお願いします」



と挨拶すると、みんなは拍手で隆史を迎えた。

この日は、スークを含めて三曲の練習があつた。隆史は、チェロの二人のメンバーから無理やりトツプの席に座らされて緊張もあつてか、思うように弾けなかつた。スークを多少練習してきたのだが、かつこ良いデビューとは行かなかつた。

練習のあと、真弓に

「感じのいいカフェがあるから少し話していいかな  
い？」

と誘われて、隆史は合奏団のことなども聞きたいと  
思つて付き合ふことにした。隆史の青い車は、真弓  
の赤い車のあとについて感じの良いカフェというの  
に向かった。それは隣街の福井にあつた。確かに開  
放的で洒落たカフェだった。

「来てくれて嬉しい」

席に着くと、真弓はあらためて言った。この台詞を隆史はこの日何度真弓の口から聞いたことだろう。

「実はあの年賀状、室井さんがきつと来てくれると思いながら書いたのよ。だってスークの弦楽セレナードがやりたいて、室井さん、しよっちゆう言つてたでしょ。でも向こう辞めてまでは思わなかったけど」

「練習日がどつちも日曜だから。とにかく歓迎して

もらって嬉しいよ。上松さんが大津辞めたとき、何故かもう会えないような気がしなかつたけど、こんなに早く会えるとはね。それに、合奏団も何かいい雰囲気だね」

「気に入ってくれた？よかった。合奏団の初めての話し合いで希望曲を出し合ったとき、私がスークを挙げたの。無理だと言ってみんな反対したわ。でも私、最初は手堅くというのではなくて、一回目だか

「らこそ思い切ったプログラムに挑戦しようって強引に主張したの。反対意見も強かったけど私の粘り勝ち」

「でも、みんな上手く奏いてたじゃないですか。僕も相当気を入れて練習して来ないといけないと思います。チエロの人たちも結構上手かったし」

「室井さんは大丈夫よ。今日は少し緊張してたみたいだけど、スークのソロの音なんて、あんなに良い

音で奏く人はプロでもそうはいないと思つたわ。私、感動した」

「感動は大げさだよ。ソロのところなんか弓が震えてたのに」

「そんなことないわ。練習終わったとき指揮者に、良い人誘つてくれてありがとうつて言われたもの」

「そのうちすぐにメツキが剥がれるよ」

「室井さんの素晴らしい音は、メツキなんかじやな

いわ。私、前から室井さんの音、惚れ惚れするくらい良いなつて思つて聞いていたもの」

「鯖江つて、漆器だよね。漆はメツキみたいに簡単には剥がれないんだよね」

「こんど家にも来てくださいな。実家、漆器作りなの」

「実家なんですか。じゃ、ちようど実家があるところの方に、ご主人が転勤されたんだ」

「違うの。別れたの。彼は今も大津よ。私、旧姓の鰐淵に戻ったの」

こんなこと話すときも、真弓は笑顔を絶やさなかつた。

「知らなかった。そんなことになっているのに、大津で全然気が付かなかつた。いつも明るくしてたから」

「彼、何があつても明るい私がバカに見えたのじゃ



ないかしら」

と言つて、真弓はまた笑つた。

隆史は、真弓の笑顔は本当に美しいと思つた。そして摩周湖のように深く澄んだ大きな目で見られると、惹き込まれるような気がするのだつた。

帰りの車で隆史はスークの曲のことではなく、真弓のことばかりが頭に浮かんでくるのだつた。

「鯖江、良かったのね。あなたが満足して興奮しているのがわかるわ。念願のスークですものね。行く前にだいたい練習してたし。上手くいったのね」

夕食のあと美紀にこう切り出されて、まだ真弓の表情が瞼にちらついていた隆史はドキツとした。

「いや、あまり上手くいかなかった。チェロ、結構奏ける人たちみたいなのにいきなりトップに座らされて緊張しちゃってね。でも良い合奏団だった。指

揮者は音楽のよくわかる人みたいで、練習の進め方も良かったし。それにバイオリンもビオラもうまい人が揃ってた」

「上松さんは？」

「コンサートマスターだった。上松さん、離婚したんだって。鰐淵さんで旧姓で呼ばれてた。実家が鯖江なんだって」

「ええ？鯖江って、ご主人の転勤先じゃなかったん

だ。去年家で最後のカルテットの時だつて、いつもと同じに明るく振舞つてたと思つたけど。何かそんなこと言つてたの？」

「いや、何にも。今日、指揮者が彼女を呼ぶのに「ウエマツ」という発音じゃない言い方をしたような気がしたので、あとで聞いてみたら、そういうことだった。実家は、鯖江で漆器工場をやつてるらしい」「へーえ。あんな綺麗な人を離婚する旦那もいるん

だ。それとも彼女の方から？」

「どうだったんだらうね」

隆史は練習のあと真弓とカフェに行つたことも、もちろん

「今度実家に来て」

などと言われたことも美紀には言わなかつた。美紀とは問題なく上手くいっているのに、隆史は胸騒ぎが治まらなかつた。そして、火照つた身体でその晩

美紀を求めた。

次の練習のあとにも、真弓は同じカフェに隆史を誘った。三十分だけと言って、隆史も従った。それから、練習後の三十分のカフェは鯖江での二人の新しい習慣になった。隆史と真弓の距離は練習のたびに近づいていった。

つつじの綺麗な季節だった。いつものカフェで隆

史は、両親が温泉旅行に行つて留守だという真弓の実家に誘われた。隆史は少し考えてから小さく頷いた。二台の車は田んぼの広がる道を走つた。河和田という漆器で有名な地域の中に真弓の実家はあつた。作業小屋や両親の住まいに隣接した離れが、一人暮らしとなつた真弓の城だつた。

出された茶を飲みながら、実家は何代も漆器作りに携つていふことや、真弓がいまはその家業を手伝

っていることなどをポツリポツリと話していたが、その話に区切りも無いのに言葉を切ると、

「好きです。チェロの音も室井さんも、大津のときからずつと好きでした」

堰を切ったような言い方だった。隆史は紅潮した真弓の顔を見つめた。

この日があることは、真弓が合奏団のみんなにス



ークの曲を取り上げること認めさせたときから、そしてそれを知らされた隆史が天津のオーケストラを辞めてこの楽団に入ることを決めたときから運命付けられていたのかも知れない。二人は、分別だけでは制止できない大きな力によって引き寄せられたのだ。隆史はトルストイの小説「クロイツェル・ソナタ」で読んだ親和力のことを思った。

この日隆史は真弓の家に行く前に、合奏団で話し

合いの会があるので遅くなると家に嘘の電話をかけた。娘が電話に出た。美紀は友達と山に行っていて、まだ帰っていないかった。

隆史が十一時ころ帰宅したとき美紀は帰っていた。隆史は聞かれもしないのに、合奏団であつたという架空の話し合いのことを饒舌に喋つた。

(了)

## 編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな  
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同  
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣  
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。  
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中  
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう  
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの  
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))  
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前についで

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

## 著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め



た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も  
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた  
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴  
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの  
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら  
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。  
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

## 今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

### 既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

## 既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

## 三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

## 阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる轉身

ある男の臨終

野の寂しさ

## 四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットの風景

「オセロ」く手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？



## 紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

## 短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

## 12 カルテット

## 最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

---

## String Fiction Series 03

### 親和力

---

2022年10月30日初版発行

著者：山中與隆

編集：山中伶子

<https://www.ac-illustr.com/>

・タイトル：弦楽器グラデーション

作者：t-dunさん

イラストのID: 2610321

・タイトル：花のフレーム2(黒)

作者：猫エンジンさん

イラストのID: 1587380

<https://www.silhouette-ac.com>

・タイトル：譜面台

素材のID: 105365

・タイトル：譜面台

素材のID: 105366

<https://www.photo-ac.com>

・タイトル：チェロ

作者：r\*\*\*\*\*mさん

写真のID: 3669919

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>

---